保育の実践の中で「発達」を考える

津守　真

保育と発達とはどのように関連するのかを考える必要が生じ、私は、数週間、保育の実践の中でこの問題を考えた。

現象

一年間近くトイレットペーパーをちぎって水洗便所に流すことをつづけていた四歳のT夫が、三学期はじめのある日、トイレットペーパーを自分から大人の手に渡し、このあそびをふっつりとやめ、皆のあそぶにぎやかな場所で動き回って遊ぶようになった。それと共にいくつもの変化があった。石を溝の中やフェンスの向う側に投げたいのだが、人にぶつかると危いので私は石を土の塊にかえることに苦心していた。この日、T夫はボールを持って滑り台のベランダにいった。上から落したボールを私が拾って投げ返すと、T夫は口をあけて笑い、ボールを私に投げ返した。はっきりと私に向って投げ、私が投げ返すことを期待している。ベランダの上と下で一時間近くもボールのやりとりをした。翌日登校

したときに、T夫は母親がはきかえさせようとしたくつ下をはこうとせず、ズボンも洋服もぬいでしまった。すべてを手放して自由になったようにみえた。T夫は素っ裸で元気に動き回った。

その数日を境にして、前と後とでは変化がある。石や土を投げることはボールに代った。大人を困らせるトイレットペーパーの遊びを便所に閉じこもってするのではなく、皆の中で動き回って遊ぶ。その行動は社会常識にかなうように変化した。こんなに良い方向に変化したというのは、大人の側からの外的視点である。

実践の中で保育者に気付かれている変化は、外的視点からの行動変化も含まれるが、それだけではない。子ども自身の側に生じている変化があるので、保育者にとって発達として印象づけられるのである。

このことの中で子ども自身が変化している。T夫はトイレットペーパーを自分からしりぞけて他の遊びを選んだ。もはやトイレットペーパーや石にこだわるのでなく、それらから解放され、自分が選択する主体になっている。これは個人の内的発達の視点である。

同じ頃に私の家に遊びにきた三歳のS子は、はさみの刃を両側に開いたまま紙にあてて切ろうとしていた。S子は一週間前にはさみで紙に刻みをいれていたが、この日ははさみを使うコツを思い出せないでいるように思えた。私が親指と人さし指とをはさみの把手にいれてやると、S子は苦心して紙を切りはじめた。切りやすいようにと私が紙をおさえる

と、私の手をふり払い、自分でやろうとする。うまくゆかなくとも、自分で注意を集中し時間をかけてそのうちに切ってしまった。この場合も、はさみで紙を切れたかどうかという外的視点だけが発達の見方なのではない。まして、次には輪廓に沿って切れるようにしようとするのが発達的観点なのではない。出来上りは拙くとも、自分で切ろうとし、注意を集中して試みるところに子どもの側の発達がある。

六歳のA子は、何年も遊び馴れたクラスルームで遊ぶことを好む。A子はこの部屋ではいまわり、立ち上り、歩くようになった。庭や他の部屋に連れ出そうとすると声を上げていやがる。それでも私共担任は、空間をひろげることが発達上望ましいことと考えて、一日に一度は他の部屋に連れてゆこうと話し合ったこともあった。けれども、そのはなしはその時かぎりで二日とつづいたことはない。A子はいつも過しているクラスルームの中で満ち足りている。自分からその空間の外にゆこうと思わない限り、むりに連れ出してもこの子の世界がひろがったことにはならないだろう。この子の眼が外に向いたときに、たとえ部屋から出なくともその世界はひろがったと言えるだろう。

外から見た発達

子どもの行動が社会常識に近づく方向に変化するのを見るとき、これは社会常識という側面から外的に子どもを見る見方である。直線軸の上に同種の行動を並べて、低い段階か

ら高い段階への変化をみるのも外的視点からの発達の見方である。このような特定の側面と規準を定めた外的観察は研究的興味の対象となるが、保育の実践にはそぐわない。この見方をとるとき、大人は関係の外に立つ者となり、保育実践からはなれてしまう。

個人の内的発達の視点

外的変化に目を奪われるのでなく、それをしている子どもに目をとめるとき、子ども自身が変化していることに気が付く。子どもがトイレットペーパーの遊びをしなくなったと見るだけではなく、子ども自身がトイレットペーパーをしりぞけてボールを選んでいるのを見るとき、選択する自由を得た子どもの内的変化を知る。子どもは何かにとらわれ、支配されているのではなく、自分が外界を支配する主体となっている。これは個人の内的発達の見方である。

保育的関係の中で見る発達

保育の実践の最中に子どもをみるとき、その場の子どもを見ているのであるが、しばしば、過去における保育的関係の中で見た記憶と重なる。前にはあんな風だったのがこんなに変化したという思いをもつとき、はっきり意識されているのはひとつの側面でも、半分無意識のままに保育者自身を含めた全体像が同時に記憶されている。こんなことができるようになったという保育者の驚きは、子ども自身の内的発達への視線を含んでいる。

保育的関係においては、具体的状況を通してその子どもの理解が保育者自身の中で常に新たにつくられている。過去の時点でも、現在の時点でも、そのことは同様である。

子どもの側に育ちつつあるものについても、保育的関係の中で知覚されるのは、行動上の発達だけではない。自分が、自分で、自分から何かをするという自分が育っているかどうかが保育者の関心である。そこが育てられていなければ、ある能力だけが向上しても、保育者にとっては不満足である。

個人の内的発達と社会

子どもが自分の意志で自由に選択し、自分から発動して何かをなしえたとき、その子どもは堂々として自信があり、幼くとも一人前の成熟した人間の風格がある。それぞれの時期の小さな世界に、それなりの成熟があり、将来に開いてゆく小さな核がある。大人の世界ならば、自由、勇気、忍耐などという語で表現するような、人間の内部のものでありながら、社会をつくるのにたいせつな価値である。内部にそれを育てられている人は、社会を展開させうる人である。個人の自我の発達と社会とはここにおいて結びあう。

社会は、身近なところで言えば学校であり、保育の場である。個人の自我が育てられ、子どもたちが自分で遊べるようになるとき、その社会は力動的に展開する。その力動的な保育の場が、また、個人の内部を強め育てる。

保育の場の小さな世界のできごとは、大きな社会を動かす大人につながっている。

A子はまだ自分から部屋の外に出ようとしないけれども、外から入ってくる大人たちがA子に笑いかけ、話しかけ、しばらく遊んでゆく。こうして過すうちに、部屋の中にとどまりながらも、外側の世界に対する関心はA子の中に準備されつつあるにちがいない。

T夫がトイレットペーパーにとらわれ、こだわっていたときにも、保育者はその最中のT夫の世界を感受していた。吸いこまれ流れ去る水の音、次々に紙片を手放す体感など。T夫が保育者と共にそれらを確認する日々があった。そのときには保育者とその子どもは共同の場から孤立しているようにみえる。不思議なことに、その積み重ねの中で、子ども自身がそこから解放され自分で選択して遊ぶ日がくる。そうなると、子どもも保育者も共同の場のダイナミズムの中に加えられる。共同の場は、常に、孤立したようにみえる部分を内に含んでいる。自分で遊べない子ども、とらわれた自我、弱い自我の者を、共同社会はいつも自らの内にかかえている。そこに保育的配慮が生まれる。自分たちの中にひきこもうと外から力を加えるのではなく、弱い自我の者が自分自身となって生きられるように、守り、共にあり、育てる機能をもっているのが人間の共同体である。

（愛育養護学校）